ワイリー軍団 in 21××年

黒金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ワイリー軍団　ｉｎ　２１××年

【Ｎコード】
Ｎ７９９４Ｗ

【作者名】
黒金

【あらすじ】
『ロックマン』と『ワイリー軍団』との長き戦いから１００年余り人類とレプリロイドが共存する社会の中で、主を喪ったワイリーナンバーズはそれぞれの道を歩いていたが…
『イレギュラーハンターＸ』の世界でワイリー軍団が生きていたらのｉｆ

プロローグ

『滅んでしまえ』と愚か者が叫んだ。
そして、その通りになった。

２２世紀。
失われたものを取り戻そうと電脳化と機械化の進む社会
人と機械の境界が曖昧になった時代
それでも人の業と機械の悲しみが相容れない世界…

夜のネオンが輝く高層ビル群。その日も路地裏からコンクリートと鉄筋の粉塵が舞い上がっていた。
暗い路地裏の向こう、四本足の蜘蛛のような建築物解体用メカニロイド『タイラント』がその巨躯にものを言わせて壁と地面を破壊しながら大通りに顔を出した。
そこへ待ち伏せていた警ら組織『イレギュラーハンター』のレプリロイドが構えていたワイヤーアンカーを発射。
前肢に命中し、レプリロイドの後ろの地面に固定される。
続いてタイラントの後ろで隙を伺っていた小隊が残った後ろ脚にアンカーを撃ち込む。

〈Ａ班、アンカー打ち込みに成功〉
〈Ｂ班、確認した。まだビームが残ってる。Ａ級ハンターが到着するまで待機〉

四肢を封じられたタイラントは身動きの出来ない状態となった。だ

が、安心は出来ない。
今回は明日の作業に向けて待機中だったタイラントが深夜に突如起動し暴走。
付近を警ら中だったハンター達が対処に当たったと言う流れである。
最近、特にここ一ヶ月のシティ・アーベルでは日常茶飯事となった光景だ。
この後は攻撃に特化したA級ハンターが応援に駆けつけ対象を破壊するのだが、僅かに遅れてしまう。
余りの事件発生率にイレギュラーハンターのホットラインはパンク寸前なのだ。
その様子を現場から一ブロック離れた高層ビルの屋上で、黒い青年がメカニロイドより感情の無い目で観察していた。
短く切り揃えられた赤毛、端正な顔はバイザーのため表情が見えない。
黒いフードマントに、同色の防弾ジャケットとボディスーツ。首から下は黒という風体である。
屋上の縁に座って通信を傍受していた男はおもむろに立ち上がり、隣のビルの屋上に跳び移った。
何の苦も無くそれを繰り返し、拘束を外れんと暴れるタイラントの真上近くまでたどり着いた。
懐に忍ばせた金色に縁取られた黒い棍を取り出す。そして何の予備動作もなく、タイラントの真上に飛び降りた。
高度５０ｍ余り、七層の超合金の背中に勢いを殺さず降りてもナノカーボンの筋繊維とチタンの骨格は耐えきった。
突然の乱入者に驚愕するハンター達を他所に、彼は衝撃で混乱するタイラントの四肢の隙間を縫って接続端末を探し出す。
整備用に取り付けられた梯子に足をかけ、腹にあたる部分の制御盤を見つける。カバーを棍で剥がすとすぐに焼き切るために腰にあるポーチからコードを取りだし、端末に合わせる。
途中タイラントの振り落としにあったが、何とか接続し回路の焼き

切りに成功。
タイラントは痙攣を起こしたように震えるとすぐに停止した。
やれやれと青年はタイラントの背に戻ったが、当然休む暇などなかった。

〈そこの黒いの！ただちに武装を解除し投降しろ！〉

黒い警察に似たデザインの指揮官ハンターがスピーカーを片手を怒鳴っている。その後ろにはスタンガンを構えたハンターが二人。
ヤバいと舌打ち一つ。壁を蹴りながら再びビルからビルへと移る。
町の中心が見え始める頃にイレギュラーハンターの輸送機『ビーブレイダー』が頭上を通りすぎた。現場に駆けつける予定だったA級ハンターを乗せているのだろう。
降り注ぐサーチライトと黒い威容を無感動に見送ると、光輝く街を見渡す。
夜風が熱を上がった体を冷やしていく。心地好いとは感じない。彼の身体は随分昔から暑さも寒さも感じなくなっているのだから
サイレンの音が止めば、シティ・アーベルはいつも通りだった。

２１××年
ロボット工学の権威、Ｄｒ．ケインによって、人間的思考を持つ完全自律型ロボット『レプリロイド』が開発された。
それに伴い、従来通り単純な命令に従うロボットは『メカニロイド』と呼称され区別化された。
この第五次ロボット革命により、第三次世界大戦によって荒廃し、衰退した文明社会は新たに復興を遂げることになる。

だが、その一方で増加するレプリロイド、メカニロイドの暴走及び犯罪行為『イレギュラー化』が社会問題となった。
多くのレプリロイドを有するシティ・アーベルはこれを取り締まる為に『イレギュラーハンター』を設立。
戦闘型レプリロイドが製造、配置され、治安維持にあてられた。

『ロックマン』と『Ｄｒ．ワイリー』との戦いから、実に一世紀が過ぎた頃のことである。

プロローグ（後書き）

この話は『ロックマンX』のリメイク、PSPソフト『イレギュラーハンターX』を基にしております。
買うから続編出してくれCAPCOM…

連続暴走メカニロイド事件（前書き）

ここに出るエンカーはロックマンキラーのエンカーではないので悪しからず。
ファンの方申し訳ありません。

私はシティ・アーベルが『アップルシード』のオリンポスみたいなものと思っています

連続暴走メカニロイド事件

明くる日の朝、新聞の小さな欄に深夜の騒ぎが報じられた。

「これで六件目…」

風情のあるキセルを吹かしながら、これまた風情のある着流しに陣羽織を羽織った隻眼の男が溜め息混じりに紫煙を吐いた。

「先月を合わせて八件。うち半分は『善意の協力者によって解決』…か」

新聞を下ろし、男は僅かにしかめた顔を上げる。
紺色の頭巾に中心に赤い宝石のようなものを填めた巨大手裏剣で何か間違ったニンジャ感なデザインである。
はっきり言って何か色々間違ってる。
だが草臥れた中年のような目の奥には機械特有の冷たさと収縮レンズがあった。

「早く事件そのものの解決に至って欲しいものですな。長引くと無茶をする者が後を断ちませぬ」

その目に呆れと半ば諦めを込めて、陣羽織のレプリロイド―ＤＷＮ・２４『シャドーマン』は隣で寛いでいる青年を見た。

「そっちのシマじゃやらないよ？」
「どこでされても困ります。エンカー・ザ・ゴールドクロウ殿」

憮然としながらシャドーマンは再びキセルをくわえた。

エンカー――昨夜暴走タイラントを停止させた青年は懲りた様子もなく、のほほんと笑みを浮かべて返した。

「今まであこぎにやって来たからな。その補填だよ。最近賞金首ってそんなにいないし」

ゴールドクロウ（金食い鴉）
三年前突如シティ・アーベルに現れ、死骸を漁る鴉の如く市内はおろか周辺の賞金首をほぼ狩り尽くしたことで名を馳せた賞金稼ぎである。
晴天の下、高層ビルの屋上で黒づくめのマント男と時代劇のような格好のレプリロイドは余りに浮いていた。
しかしそれを見る者は誰もいない。

「そうおっしゃいますが御曹司。何も毎日のように街を巡回して事件を探さずとも良いでしょうに？お陰で組織は楽させて貰っておりますが、仕える身としては毎夜気が気でなりませぬ」

わざわざ彼を賞金稼ぎとしてでなく名でなく、いつもの呼び方に言い直して説教と文句を垂れるシャドーマンだが、相手が笑って流すのは数十年の付き合いで解りきっていた。
再び新聞のゴシップ欄に目を落とす。

「ところで、もういい加減俺のこと畏まって呼ぶ必要無いんじゃないか？」

そのエンカーが、笑いを止めて少し真面目な口調で言った。

――――もう『博士』はいないんだから

暗にそう言っていると知りつつ、シャドーマンは表情はそのまま静かに返した。

「その議論は百年前と三年前に結論が出ております。後にも先にも我々の主になれるのは御曹司だけです」

彼が本名を捨てた理由も、自分達の製作者の跡継ぎを忌避する本当の理由も理解した上で彼は言っている。
エンカーは感情では反論したかったが、シャドーの諦めではなく遠くを見るような顔を見て何も言えなくなった。

「……ところで『ゼロ』は？」

憮然としながら、話題を変えたのは視線の向こうで見慣れた土煙が見えたからだ。
彼らがいるのはシティ・アーベルの中心に近い区域である。
行政機関はもちろん、警察組織――――イレギュラーハンター本部も近い。
昨日の騒ぎの始末が収まらない内に今日この騒ぎである。二人はこれを見に来ていたのだ。

「今見える暴走タイラントの鎮圧に駆り出されているところでござる」
「またタイラントか。こないだ責任者捕まってＯＳ全部書き換えたばっかだよな？」

バイザーを最大望遠にして現場を観察。
解体中のビルの中にいるだろうタイラントを待ち伏せるように道路の車や瓦礫に身を隠す数体のハンターレプリロイドを確認。
亜人型レプリロイドが一体――――第十三部隊所属Ａ級ハンター『ア

イシー・ペンギーゴ』
赤いアーマーとヘルメットが印象的な長い金髪の第十七部隊所属特Ａ級ハンター『ゼロ』
後はアンカーバズーカを持った一般ハンターが四体。
その後方で現場を封鎖する警備が多数。突入隊と警備の間に隊長格のレプリロイドがいた。
緑色のアーマーを纏った巨漢。イレギュラーハンター第十七部隊隊長にしてイレギュラーハンターの実質的指導者『シグマ』である。

「今回はシグマも来ておりますな」
「ここ最近の暴走事件の頻度は異常だしな。直に確認したいんだろうよ。ゼロもいるし」

レプリロイド開発の太祖Ｄｒ．ケインの最高傑作としても名高いシグマは指揮官としても戦闘者としても優秀な一材である。
後方で指揮を取ることが多いが、部下のために自ら前線で戦う姿勢故にハンターのみならず市民からの信頼も厚い。
しかもゼロの直属の上司である。その構図が意図するところと経緯を考えると『兄』であるエンカーやワイリーナンバーズは彼にたいして好印象を持てるものではない。
が、末弟が記憶喪失であり、監視下とは言え組織内では（能力的にかなりの封印措置が取られているとは言え）特Ａ級ハンターとして活躍しており、危険な仕事には変わりないが兄弟の中で一番安定した社会的立場を得ている。
今のところゼロを暗殺する動きも無いので、兄弟たちもそれぞれの形でだが『様子見』で現状に納得することにした。
その代わり、シャドーマンの組織を初め何体かのワイリーナンバーズがイレギュラーハンターの内外を偵察している。組織が暴走した時に備えてだ。

「ところで最近ゼロに相棒が着いたのをご存知で？」
「うん、同じ部隊のB級だってくらいなら」
事件を前に世間話をするように話題を変える二人。
既に『最強』と特A級が二人も動員されている時点で鎮圧は確実だと判断していた。
それに昼まで公務に介入したら流石に手が後ろに回る。
「拙者も直に見たわけではありませぬが、そやつのことをアストロから聞いたときは驚きを隠せませんでした。…ふむ、今着いたところのようです」
基本常に冷静なシャドーマンが、百年近く闇の中に身を置いている『怪人』が驚くことはそう多くない。
ふと高高度を飛行するジェット音が義体と機械の聴覚に届く。
青空に飛行機雲を書いて飛ぶ紫色のビーブレイダー。ハンターを急降下させるためのタイプだ。
そのハッチの一つが開かれる。今まさにハンターが急降下する瞬間だった。
「で、そいつの名前は？」
「正式名称かは不明ですが、皆に呼ばれている名は…」
ハンターがパラシュートもなしに降下していく。狙いは暴走タイラントの真上。
次第に件のハンターの姿がはっきり見えてくる。
ゼロとは正反対にヘルメットからフットパーツまで深い青でまとめた少年型レプリロイドだった。
その様子を先程とは違う遠い目で見つめながらシャドーマンはそのハンターの名を言った。

「『X（エックス）』」

空中から垂直下に放たれた蒼い閃光。
エンカーにとってもシャドーマンにとっても、そして全てのワイリーナンバーズにとって懐かしいその色は、しかし記憶にある輝きの倍の大きさでタイラントを叩きのめした。

目標の沈黙を確認したエックスは再び空中で、ただし横へバスターを撃つとその反動を利用してビルの壁に貼り付き地上へと降りた。
現場では歓声が上がり、ハンター達はすぐに沈黙したタイラントを確保しにかかった。
急いで制御盤を確保して完全に停止させるためである。
だが、そうはいかなかった。

「まだですな」
「ああ、今外部からのマニュアル起動を確認した」

熱源感知でタイラント内部の急激な熱上昇を確認。

〈再起動！？〉

確保に近づいたペンギーゴ隊にタイラントの前肢が降り下ろされた。
そして一転騒然となる現場。

「…操作系へのハッキングだな。犯人は腕を上げたか？」
「あるいは防壁のコードが流出されたか…ですな」

〈奴の足を止めるクワッ！〉

明らかな敵意をもって暴れだすタイラントにペンギーゴが氷を吐いて足を、ハンター達はアンカーで拘束にかかる。
だがタイラントは拘束を力づくで振り払うばかりか腹の下に格納されている巨大アームを伸ばしてハンターの一人を捕らえてしまった。

〈ゼロ、そちらからジェネレータを狙撃することは可能か？〉

タイラントには整備用の制御盤のは別に緊急停止用にジェネレータが赤いプラスチックに覆われて露出している。
それがちょうど腹の真下にあるのだ。

〈駄目です！奴の動きが速すぎて……！？〉

別方向から近寄ったものの、忙しなく動くタイラントの脚を避けながらゼロが苦渋を浮かべながら報告を返す。
ついにアイカメラ横についている一対のレーザー砲で周囲を薙ぎ払いにかかった。
本来建築物の壁を切り取るためのビームが通りに配置されたパトカーをナマスにし、警備ハンター達もろとも吹き飛ばしていく。
射線上にいたシグマは既にその身体能力を活かして高く跳躍して近くのビルの屋上に立った。
そのシグマのもとにエックスの通信が届く。レーザーに巻き込まれないため迂回して現場へ向かう最中だった。

〈隊長、奴のパワーは予想以上です！私がもう一度奴を止めます〉
〈よし、行け！〉

エックスが配置に着くまで現場から離れようとするタイラントはゼロがバスターを撃って足止めする。
すぐ前面に着いたエックスはバスターを構え狙いをつけた。

だがタイラントを操っている奴は狡猾だった。
エックスの狙いを察して未だアームに捕らえていたハンターを射線上にかざした。一瞬エックスが動揺したのがわかった。

「ほう、人質とは考えたな…」

機体の損傷を度外視した動きに合わせ、間違いなく今までと同じ犯人だと確信したシャドーの横でエンカーが無言で立ち上がった。
バイザーの下の緑色の瞳から感情が消え失せ、右手には黒い棍、リフレクトスピアーの量産型が握られていた。

「ちょっと行ってくる」

口では散歩にいくようで、全身から闘気をみなぎらせている。ヤル気だ

「まだですぞ、御曹司」

今まさに飛び出さんとする主を静かに制する。
望遠視界の向こうでは何とか味方を傷付けずジェネレータを撃とうと苦心するエックスと、早く撃てと苛立つペンギーゴが見えていた。
このままではハンター達ばかりでなく市街に被害が拡がるのは火を見るより明らかだった。
迷うエックスの横をシグマが駆ける。
一瞬のことだった。
彼が人質の片腕を犠牲にしたとは言え、ビームサーベルで頑丈なアームを切断し、ジェネレーターを文字通り焼き切ったのは
タイラントは、タイラントを操っていた者は反応する間も無かった。
その迅速で鮮やかな手際に誰もが呆然する中、タイラントは完全に沈黙。

現場は喝采に溢れた。

「とりあえず一件落着…ですかな」

呟くシャドーマンの隣でエンカーは我知らず安堵の息を吐いた。
現場は後始末と現場検証、負傷者の救助が始まっていた。

「…で、話を戻すがあの青い坊やは…」
「表向きの製作者はゼロと同じＤｒ．ケインですが詳しい出自は不明。しかし容姿の傾向及び攻撃方法、性格の傾向から判断するに十中八九『Ｄｒ．ライト』の製作だと見て間違いありませぬ」

Ｄｒ．ライト
前世紀の工学史における『ロボット工学の父』
かつて祖父のライバルだった男
随分懐かしい名前を聞いた。最後に会ったのは『あいつ』が死んだ夜だっけ。
視界の先では多分『あいつ』の弟であろうエックスがペンギーゴから「何故即座に撃たなかったのか」と咎められていた。
多分理由を説明したとて合理がモットーのペンギーゴは納得しないだろう。
横でシャドーマンが説明を続ける。

「一年間の訓練期間を終え、半年前に正規ハンターとして登録され、その後実力と反比例してイレギュラー撃破数は微妙ながらもＢ級として活躍中。シグマの指示で三ヶ月前にゼロと組んだ至りと…まあ、ハンター内部の評価は『あの』シグナスの数少ない友人の一人として変わり者の甘ちゃん扱いというところですな」

とは言え、将来『あいつ』同様自分達の脅威になる可能性は無いわ

けでは無い。
その事を察しつつも、シグマから静かに戒められ諭された後、何か思い悩むエックスの肩に手を置いて励ます末弟の姿を見て思わず頬が緩むエンカーであった。

「…聞いておりますか？」
「聞いているよ。うまくやっていけてるみたいだから、つい…な」

新聞をたたみながら咎めるような目線を送るシャドーマンに冗談のように返すエンカー。
だがその笑顔は本人が思っている以上に穏やかだった。
それに再び複雑な思いを抱くシャドーマン。

「あいつの身元引き受け人は？」
「同じくＤｒ．ケインになっております。多分『発見者』ですな」
「…その辺は本人に聞いた方が早いか」

Ｄｒ．ケインがレプリロイドを開発させた経緯には謎が多い。
公式にはＤｒ．ライトのラボ跡を発見し、残された論文や資料からヒントを得たとなっているが、それ以上の情報は開示されていない。

「んじゃ、マグとジェミニに連絡入れたらちょっくらラボにお邪魔してくるわ」
「銃火器は使わぬように」
「使わねぇよ」

踵を返してその場を去ろうとするエンカーに釘を差し、「ああ、それと…」と付け加える。

「此度の連続暴走事件…如何見ます？」

クレーン車が到着し、ワイヤーに吊り上げられて回収されていくタイラント。
シャドーマンにはそれが不吉の前兆に見えてならなかった。

探偵事務所　M&G（前書き）

ちょっとした幕間です

探偵事務所　M&G

シティ・アーベル東地区。
大通りから裏へ少し歩いたところに他のマンションやビルに比べてこぢんまりとしたビルがある。
出入り口には金属のプレートに『私立探偵事務所M&G』と銘打たれていた。
その横には紙で「ペット探しから浮気調査まで。２４時間対応、料金は応相談」のキャッチフレーズ。

〈そっちでも停止後再起動したか…〉
「ああ、そうだ」

部屋の主の一人ＤＷＮ．１９ジェミニマンはエンカーからの通信に応えながらＰＣのモニターで暗号コードの発信場所とこれまでの事故現場の地図を見比べていた。

「お陰で複数犯によるハッキングだってわかってな。肝心のメカニロイドはＶＡＶＡがスクラップにしちまったけど」

いやー、クラッシュ兄に見せたかったぞ。あの壊しっぷり。と、愛銃のマシンガントンファーにマガジンを詰めているのはＤＷＮ．１８マグネットマンである。

「ついでとばっちりで吹っ飛ばされたハンターが三人、付近のビルが二練半壊したがな」

呆れたように付け加えるジェミニに通信の向こうのエンカーは眉をしかめる。

〈先週も建築現場潰したばっかだろ？最近顔見せなくなってから荒れてないか？アイツ〉

ＶＡＶＡはＡ級イレギュラーハンターであるが、全身銃火器と言わんばかりに肩部バズーカにアタッメントアーム＆ａｍｐ；フットと『見敵即殺』を体現した男である。

エンカーもマグ達も事件の関係で『偶然』何度も会う内、言葉少なに酒を呑みあったり、事務所に暇を潰しに来たりする仲になった。たまに奴の担当する事件に介入しちゃったりして追いかけ回されたこともあるがそこはご愛嬌。いつかナパームに会わせてやりたいと思う。

閑話休題。

苛烈な人物には間違いなかったが、三ヶ月前ぷっつり連絡をたってから行き過ぎたイレギュラー『破壊』が目立つようになっている。

「この分だと懲戒処分くらってんな…」

それで済めばいいが…と、憂いつつ二人は自分達の出来ることを優先させる。

「ともかく事件中配線の特定をやっていたんだが、いくつか衛星経由でコードを発信してようだ。市内に発信源らしい場所は既に特定してあとは二つだけになった」

「んで今夜辺りにまた事起こすだろうからアタリつけて張り込みにいくわけ」

マグは愛銃の次に携帯用の電脳錠の具合をチェックして用意を整えた。

ジェミニもアームパーツを開放してジェミニレーザーのバッテリー

と実弾のカートリッジを装填する。

「もうハンターの方でも検索は出来ているだろうが…どうもやり口にしてはやることが幼稚というか…」

「ボコにしてとっちめてから聞き出さしゃいいじゃん？」

「お前は黙っとれ」

〈シャドーは何か大規模な事件の前触れだって言ってたな〉

「やっぱりそう思うか？つまり今はお試し期間か…」

かつて取った杵柄とは言わないが、似たようなことを何度もやっていたワイリーナンバーズとしては下手人たちを捕まえて『終わり』とは考えない。

そもシティ・アーベルに存在する自律型メカニロイドの電脳警戒レベルは最高に設定されている。公的機関の人間でもアクセス出来るのはごく僅かだ。

ただの労働者の腹いせだけではリスクが高すぎる。

〈昔は俺たちの『仕事』だったのにな…〉

「言うな。虚しくなる」

ポツリと呟かれた言葉にジェミニは即座に遮った。

そこへ中継通信が入る。コードは０２４。シャドーからだ。

〈御曹司、つい先程ハンターの方でコードの送信機関の割り出しに成功した模様です。今夜中に西地区にあるアジトに突入するとのことです〉

三人の電脳に直接ハンター側で行われているブリーティングの様子が映し出される。

今朝中央区での暴走事件の発信源はイレギュラーハンター本部からそう遠くなかった。

「アタリだ」とマグが呟く。

〈ああ、ジェミニ、マグネット。取り込み中すまんが、一応組織の者を送っておこう。逃げられた時の保険だ〉

〈俺も行くのに〉

「そっちが来るまでに済ませとくよ」

〈最後に一つ…〉とシャドーマンは付け加える。

〈既にシグマがケインラボに向かいました。理由は一連の事件の見解を聞くためかと…〉

〈ああ、今後ろで奴さんの車が見えるよ。通りすぎるふりしてから潜ってみるさ〉

二人は嫌な予感がした。てっきりエンカーが市内から通信を送っているものと思っていたからだ。

「……お前、今どこいるの？」

〈今バイクでハイウェイ乗って郊外向かってるよ〉

「先に言えバカ！」

皆さん、運転中の通話は事故のもとなので控えましょう。

イレギュラーハンター　シティ・アーベル本部（前書き）

ＰＳＰ壊れた（Ｔ＿Ｔ）
仕方ないのでニコニコで『Ｄａｙ　ｏｆ　Σ』観ながら書いてます。
台詞間違ってたらご免なさい。

イレギュラーハンター　シティ・アーベル本部

エンカーがハイウェイを走っている頃、シティ・アーベル中央区。
イレギュラーハンター本部。
（公式には）十七の部署を持つ高層ビルは十階から上の練が二つに分けられ、白い音叉のような外観をしている。
任務を終えたゼロとエックスはイレギュラーハンター本部へ帰還し、広々としたエントランスに出た。
そんな二人を出迎える謎の飛行物体（ハ〇）…

「ゼロさん、エックスさん、お帰りなさいですぅ～」
「おう」
「ただいま、アストロ」

アストロと呼ばれた浮遊する〇ロもどきは二人の位置まで降りると挨拶する。
ハンター本部ではいつもの光景だ。
アストロはハンターでもなければ別の部署の職員でもない。
いつの頃からか本部の中に出没しだして、七不思議になる前に本部をあげた大捜索の後、いつの間にか副官のシグナスのオプションにされていたのである（本人曰く『拉致されて解析された』）。
最初は「何処で誰が作ったかわからんメカニロイド（？）を本部に彷徨かせるなど…」と喧しく言う者は当然いたが、いつの間にか消え、ケイン博士の鶴の一声で完全に消滅した。
まあ、神出鬼没であることを差し引けば基本人畜無害なので、シグナスの助手兼オペレーター達の人気者として本部に溶け込んでいる。
ホント何をやったんだシグナス。

「戻ったか。ゼロ、エックス」

「シグナス」
「げ」
奥の方から黒い軍服姿の壮年レプリロイドがやって来た。噂の副官シグナスである。
性格そのものを表すかのような南極のごとき冷気がエントランスの温度を二度下げる。
それを見てゼロの顔が思わずひきつる。

「ゼロ、何だ？その疫病神に会ったような面は」
「帰って早々嫌な面見りゃそうなるさ」
「まあまあ、二人とも」
「子供じゃないんだから…」

剣呑になりそうな赤と黒の間に入るアストロとエックスであった。

「まあとにかく、二人とも今回の任務ご苦労だった」
「いや、俺は…」

敬礼で返しながらも言い淀むエックスにシグナスは溜め息混じりに言った。

「話は聞いている。お前の判断は間違っていないぞ。ただ…自分側からの射撃で人質になった同僚に当たりそうだと思うなら、その場で応用を利かせろ。その為にこいつと二人一組（ツーマンセル）だろ？」
「こいつとか言うな」
「まあ、情報畑の俺が口出しする事じゃないがな」
「……」
「ドンマイ！ですよ。エックス」

四人は気付いてないが、エントランスにいる受付や道行くハンター達は普通会話している彼らを不思議そうに眺めていた。
彼らからすればシグナスは総監の次の上官であり、日頃の雰囲気も相乗して必要以外話したいとは思わない。
更に言うなら素行の悪かったフレイム某というハンターを、氷づけにして３０階から叩き落としたという噂のせいで、更に近寄りがたいことになっている。
閑話休題。
ともかく、シグナスという「冷徹」の体現者が今「友」と呼べるのはエックス達の三人である。本人たちは全く意識してないが

「ところで、今から出るところだったのか？」
「ああ、メーカー側の社長達に事情聴取と被害者の陳謝にな…」

シグナスの顔が人間でいうところ胃下垂に胆石が重なった様なしかめっ面になった。

「被害者って…」

その言葉にエックスが顔色を変えるが、そうではなかった。

「別に怪我人が出たとかじゃない。ただバカな身内が暴れすぎたせいで付近のビルがな…」
「二練半壊だそうです」
「ああ…」
「成る程」

最悪の予想をしていただけに安心していいのか微妙な気分になりながら、バカの尻拭いする羽目になったシグナスに二人は同情した。

「ちなみに総監はレプリフォースとの会議に出席して今はいない。報告書と始末書は勝手にデスクに置いていいぞ」
「始末書書くようなヘマするか」
ゼロと憎まれ口を叩きながら、シグナスは玄関口で待機していた送迎車に乗り込んでいった。
「ちゃんと納得いく理由を文章に出せよ？」
「さっさと行け！」
「いってらっしゃ～い」
副官を乗せた車が発進したのを見届けると、三人は改めてエントランスの奥へ進んだ。
「全く…大体なんで今もタイプライターで作成なんだ？」
「それにしても最近シグナスも本当に忙しそうだね」
「ほぼ毎週事件ですからねぇ。あ、エックス。おいらも手伝いますぅ」
エントランスからエレベーターに乗って指令室に向かう間、すれ違うハンター達の間ではここ最近のメカニロイド事件で持ちきりだった。
「今日だけで二ヶ所。今月に入ってメカニロイドの暴走件数６件に入るってよ…」
「その件でシグマ隊長がケイン博士に相談に…」
ふと立ち止まり、エックスは考えてこむように呟いた。
「イレギュラーか…どうしてイレギュラーは発生するんだろう？」

その問いはイレギュラーハンターになる者なら誰もが一度は抱く疑問である。
ゼロは少し考え込んでから言葉を選んだ。
「プログラムのエラー、電子頭脳の故障…俺達レプリロイドの造られるに当たっての――いわば高性能化のツケだな」
「まあ、イレギュラー化した対象を機械としてみるか人間の考えに当てはめるかで物議が割れてますけどね……ありゃ？」
アストロが説明を続けようとした時、進行方向から警らレプリロイドに両脇を固められ連行されていく紫色のフルフェイスメットとアーマーのレプリロイドが目に入った。エックスも知ってるハンターだ
「ＶＡＶＡだ…大方また何か揉め事起こしたんだろう」
「揉め事どころじゃないんですけどねー…」
アストロの呟きからしてビル二練を半壊させたのが誰か知ったエックスは納得した。
確かに彼ならやりかねないと思った。
人々を守るためにハンターはイレギュラーを倒すのだが、ＶＡＶＡの場合はイレギュラーを『破壊』することに悦びを見いだしている節があった。最近は特にその傾向が酷い。
実際巻き込まれて負傷した同僚は多いし、エックスやゼロも巻き込まれかけたことがある。
その彼が手錠されて懲罰房へと連行されていく。
納得はしても知っている同僚がイレギュラーと同じ扱いを受けると言うのは見ていて気分の良いものではなかった。
「ま、エックスみたいな甘ちゃんもいれば、ＶＡＶＡみたいなイレ

ギュラーすれすれのやつもいるってわけだ」

そう締めくくったゼロに促され、エックスは自分達の第十七部隊庁舎に向かったのだった。

この時、エックスは自分の中の言い知れぬ小さな不安の正体に気付けずにいた…

Dr.ケイン（前書き）

台詞うろ覚えです
すいません（；＞＿＜；）

Dr．ケイン

シティ・アーベルからハイウェイに乗って一時間。
大戦の影響で今や希少となってしまった自然の樹木が青々と繁る場所に出る。
そこの一画にドーム状の白亜の施設を中心とした科学設備が建ち並んでいる。
ここがDr．ケインのラボであり、政府公認のレプリロイド研究施設にして機械工学を始めとした教育機関でもある――――謂わば発展途上にある学術都市の中枢である。
既にハイウェイから直接入れる交通設備はもとより、衣食住の設備も潤沢に整った場所だ。

その広大な研究施設の一画、豊かな森とシティ・アーベルの遠景が見える位置にケイン個人の生活スペースがある。
アイボリー色の壁紙、ワイン色のカーペット、長いテーブル、清潔なテーブルクロス、小さな暖炉…質素ながらも趣のある調度品の存在と部屋の広さが博士の生活レベルの高さを物語っている。
ただひとつ違和感があるとしたら、木の棚に飾られたブリキ達だ。
既に幾つか色が褪せ、何度も修理された跡も見える。
全て、ケインが子供の頃から集めてきたコレクションだ。

「最近、騒がしいようだな…」

全体的に細く痩せこけた面、北欧系の血を思わせる鷲鼻。豊かな眉毛と髭、そして足元まですっぽり覆う青いローブ。
お伽噺に出てきそうな魔法使い、或いは錬金術師の出で立ち。その表現はあながち間違いではない。この老人が大戦で荒廃した世界を復興に導いた『魔法使い』の一人、ジェームズ・ケインその人であ

る。そしてシグマの生みの親でもある。
テーブルの上の鮭のムニエルにナイフをいれながら、ケインは静かに言った。
窓から柔らかい光が差す中、かつては多くの科学者や政府の高官を招いて議論を交わした部屋には今ケインとシグマしかいない。
レプリロイド工学の第一人者と未だ名高いケインだが、最近は隠遁に近い生活に入っていた。
原因は言うまでもなく寄る年波である。いまだその知性は衰えておらずとも、既にその身は車椅子でもある生命維持装置がなければ話すことすらままならぬほどであった。

「はい、ここ数ヵ月でメカニロイドの暴走は増加する一方です」

彼の脇に立つシグマは淡々と報告していく。現状、『最高のレプリロイド』と謳われる彼が相談するのはこの老人だけだった。

「何か打つ手は…」

ケインはナイフとフォークを持つ手を置き、息をついた。そして車椅子の背にもたれかけた。

「……エックスはどうしている？」
「エックスですか…？」

何故エックスの名が出るのか疑問に思いつつ、シグマは真面目に報告した。

「戦闘能力、行動力、判断力共に高い水準を示していますが、自ら判断を鈍らせ、躊躇する傾向が見られます」
「そう、『迷う』…それこそが『X』の最大の特性だ」

眉間のシワをほぐしながら、ケインは確信のように言った。
「特性…悩むことが欠点でなく？」
「欠点か…お前にはそうだろうな」
ケインは小さく笑い、『息子』に対して諭すように続けた。
「だが『悩む』ということはそれだけ選択肢があるということだ。そして同時に可能性の多様性も表している。だが、『悩む』ことのできるレプリロイドは現状『X』だけだ…」
そう、ほとんどのレプリロイドはその域に到達していない。人間社会での役割を果たす為に情緒アルゴリズム等を制限されているのもあるが、それは技術の限界でもあった。
ケインは一息ついて、遠い目で過去に思いを馳せながら呟いた。
「私は発掘したＤｒライトのノートと『X』を参考にレプリロイドを作り、人類とのその可能性を見たいが為にこうして延命してきたが…」
部屋の中に生命維持装置の排気音が響く。
「それは最早間に合わないかもしれん…」
老いた科学者は絶望と共にその言葉を吐いた。
シグマは何も言わなかった。二人とは別の気配を察していたからだ。
足音を殺して窓の近くで銃を構える。
「どうした？」

「静かに」

シグマの言葉に緊迫を読み取ったケインはその通りにして窓から離れた。
復興に伴う高度情報化社会はまだ第三世界に浸透はしていないものの、やはりその反動によるテロ活動や企業による技術スパイは後を立たない。
レプリロイド工学の太祖として最大の標的たるケインと、その最高傑作シグマにとって馴れたやり取りである。
セーフティを外し、勢いよく窓を開け放つ。
だが、そこに人はおらず、ウサギ型のメカニロイド『レイピッド』が音に驚いて逃げ出すところだった。

日が傾いた頃にシグマはシティに戻り、再び部屋にはケインだけになった。
窓からの風景をぼんやり見つめるケインの耳に木製のドアが静かに開く音が届いた。

「このところ、目が衰えた代わりに勘が冴えてな…今日はまた誰かが来ると思っていた」

見えぬ客人に向かってケインは静かに振り向いた。

「で、私に何か御用かね？」

相手は答えない。光学迷彩で姿を隠した客人は老科学者を試す様に沈黙を守ったが、やがて口を開いた。

『Ｄｒ．ライトのラボ、ロックマンＸの発掘場所を』
電子合成音声で発せられた言葉にケインは僅かに目を見開いた。

「あそこには最早何も…」
『アルバート・Ｗ・ワイリー』

感情の窺えない声は世界が忘れようとした名を告げた。
その時点でケインは相手がＤｒ．ワイリーの関係者だと察した。
大きくは驚かなかった。予感はあった。

『資料が目当てじゃない。ただの興味だ』

感情の無い声に懇願が入る。
ケインは目を閉じて考え込み、そして応えた。

「――――場所は…」

消された下手人（前書き）

カメリーオが平素どんな会話するのか想像つかない…
あと第九の隊長ってどんな人だろう？

消された下手人

「まったく、ゼロさんは鬼です悪魔です」

手動式タイプライターを打ちながらアストロはプンスカとここにいない者に文句を言った。

「ビデオコーダーだけ渡して『ちょっと実証したいことがあるから任せた』なんて、手伝わすイコール丸投げと勘違いしてますぅ！」

隣で同じくタイプを打ちながら報告書を作成していたエックスは苦笑いした。

いつも思うが、このメカニロイドは本当にレプリロイド以上に感情に富んでいる。

「すぐに戻ってくるよ」

「どうでしょ」

プンプンしながらアストロはたどたどしい文章をカーボン紙に打ち込んでいく。慣れた手つきだ。

それに倣ってエックスも文章を打ち込んでいく。

ふとエックスの手が止まり、彼は考え込むように唸った。

「どうしました？」

「撃てなかったところをどう説明しようかな…って思って」

「ああ」

『同僚が人質に取られていたから』と理由にはなるが、エックス自

身が動揺せず冷静に対応していれば、シグマ隊長の手を煩わせることなく済んだのでは…と思えてならないのだ。

「やっぱり俺は撃つべきタイミングを間違えたのかな…」

「そうですねぇ…」

エックスは優しい。だからイレギュラー判定されたレプリロイドやメカニロイドに対して撃つのを躊躇うときがある。勿論、市民を守る義務は忘れていないし尊重している。だが、果たして自分達は本当に正しいのか？

それが他の隊員には甘さにしか映らない。

今のところ任務に失敗は無いが、彼の評価はやはり低いままだ。

「ごめん、君にこんな話して」

「いや、でも隊員の安全を優先したんでしょ？例の隊員からもお礼言われたし、皆わかってくれてますよ」

犠牲を覚悟することと犠牲を強いることは大きく違うのだ。

その境界が解らないのではハンターもテロリストも変わらない。

少なくとも、アストロはそう思う。

「シグナスだって言ったでしょ？チームなんだから一人で解決するなって。改善するべき点があるにしても、何かに偏った細胞群はいずれ崩壊するってもんですよ」

実際アストロの『兄弟』もかなり偏っていてギリギリである。

今頃、賞金稼ぎや傭兵や闇組織や泥棒をやっているだろう兄弟たちを思い馳せながらアストロはシミジミと言った。

「くよくよする前に、自分のできることで貢献しましょ。報告書の

作成が出来ることもハンターの条件です。人に自分のレポート作成やらせる誰かさんよりはエックスの方が…」

ぶつくさ言いながらタイプを再び打つアストロからちょっと負の念が出ていた。

因みにアストロの言葉通りイレギュラーハンターは報告書の作成で任務中の行動について納得できる理由の記述、及び５Ｗの文章力も要求される。

もちろん映像記録も提出されるので、虚偽の部分は無いか徹底的に調べられる。

ちなみにシグナスに言わせれば

『イレギュラーハンターは一見破壊活動をしていると思われがちだが、殆どのハンターの場合〈そうしなければイレギュラーに逃げられ被害が更に拡がる〉と判断しての行動だ。別にやりたくてやっている訳ではない。理解したか？理解しろ（↑命令形）』

と、わかるように書けとのことだ。

「…でもこれって『というわけでちょっとの被害は毎度多目に見やがれ』って意味に取れるですぅ」

「俺もそう思う…」

ちょっと青ざめながら改めてタイプを打ち始める二人であった。

――――自分の出来ることか…

タイプライターのカタカタという音を聞きながらエックスは任務の後、シグマの言葉を思い出す。

『引き金を引くことを躊躇うな。エックス』

背負うものの為にいつか引き金を引かねばならないときが来る。隊長はそう言った。
その時が来た時、果たして自分は撃てるのだろうか？

シミュレーションルーム。
エックスとアストロが報告書を作成していた頃、ゼロはヴァーチャルスペースで隊員を人質に取ったタイラントと対峙していた。
正確には昼の任務のシチュエーションである。
これみよがしにアームで捕まえた隊員を前に出し、人質であることをアピールするタイラント。
アームと隊員の隙間から赤いジェネレーターが見え隠れを繰り返し、ゼロは苦心してその隙間に照準を合わせる。
アームの動きとバスターショットの弾速を予測し…発射

『グワァォ！』

胸部に直撃を受けた隊員（仮想）の断末魔と共にバーチャルスペースが解除される。

〈ザンネン。終了〉

感情のないインターフェースの電子音声と共に命中率９５％と表示される立体モニターが現れ、ゼロは眉をしかめた。

「５％もミスっちまった…」

攻撃手としては充分すぎる数字だが、「スナイパー」の異名を持つゼロとしては大きな失点である。
やはりあそこは撃たないのが正しい判断だったのか…

そう考えるゼロに聞き覚えのある声がかけられた。
「９５％だ、大したもんじゃないか？」
「イーグリード！」
出口に立つ青い鳥人の姿を見てゼロの顔が明るくなる。
イーグリード。空中戦専門の第七部隊の隊長その人である。それを示す如く鷲の頭頂の他、背中には立派な翼があった。
ゼロにとってはエックスと組む以前からの戦友である。
「お前、ミサイル基地の警備は？」
「無人警報装置が完成したんで守備隊は縮小されたよ。今日から通常のハンター業務さ」
「そっか…」
「で、早速暴走メカニロイド事件の徴収だ。行こうぜ」
二人は道すがら積る話をしつつブリーティングルームに向かった。
ゼロの足下の影からの視線に気づかぬまま…

オペレーターが解析した犯人たちのハッキング経路は衛星から初め、国外にある何個ものコンピューターを経由して擬装していたが、結局は市内――――西地区１６番地にある空きテナントからだった。
このアジト（仮定）への摘発にゼロとエックスのチームが先行。後づめにイーグリード隊、ペンギーゴ隊が突入することになった。
時刻は既に夜を回っていた。
一方同じ頃、「派手なことやらかす奴は大概特等席（現場の近く）にいる」と言う持論のもと、それらしい東地区の空きテナントを張っていたマグとジェミニにも獲物がかかった。

五人ほどの人相の悪いレプリロイドが車で来たかと思うと、案の定中に入った。そして先頭が似合わぬスーツケースを開けると中には携帯アンテナと何十ものコードがあり、それを据え付けてあるコンピューター群に差し込んでいった。
そして今まで観測したのと同じ周波数の電波。
アタリと踏んだ二人はすぐさま突入した。
もちろんすぐに気づかれたが、武器を取り出す暇はやらない。
ジェミニはセブロの８ミリで相手の関節を撃ち抜き、残った敵はマグが接近戦で無力化していく。
あっという間であった。二人の特殊武器を使うまでもない。と言っても、特殊すぎて狭い部屋では使い物にならないのだが

「イレギュラーハンターめ！」
「うちは探偵だよ」

喚く相手を次々袋を被せて縛り上げているとき、微かな足音でジェミニが、磁力の変動でマグが侵入者に気付き銃口を出口に向けた。
侵入者も対サイボーグ用ライフルの銃口を向ける。

「なんだ、もう終わってる」

侵入者はエンカーであった。

「遅い！」

三人とも毒気を抜かれて銃を下ろす。

「そいつらが犯人で間違いない？」
「今からそれ聞くとこだ」

一人だけ袋を被らされず足で地べたに這いつくばらされたレプリロイドがいた。
マグは懐から電脳錠を取り出し、もがくそいつの送信機器に差し込んだ。

「よし、いいぞ」

糸の切れた人形のように膝から崩れ落ちた犯人の首根っこを掴んで壁に座らせたマグはエンカーに合図を送った。
エンカーは背中のバックパックに入れてあるファイバーコードを引っ張り出すとその端子を送信機器に接続し、電脳内の視覚と記憶野に侵入。回路を傷付けないように解析していく。

「左視野に侵入…」

犯人の左目がチカチカと明滅する。侵入に成功した証拠だった。

『続いて記憶野に侵入成功』

エンカーの声が電子音声に変わる。表層のハッキングはこれで完成した。あとは自白剤ヨロシク真実を述べていく。
勿論これは違法行為である。だからイレギュラーハンターがこちらに介入する前に終わらせる必要があった。そもそもこいつらの黒幕がイレギュラーハンターの手に負えるという保証は無いし、場合によってはシャドーの組織と共に闇へ葬らなければならない可能性がある。未だシティ・アーベルに介入したがるテロや列強は多いのだ。

「まずは、だ。何処でタイラントの暗号コードを手に入れた？」

尋問はジェミニが担当することになった。

『依頼人からだ。大型メカニロイドで騒ぎを起こして欲しいからと、大金と一緒にメモを渡された』

金目当てか。気持ちはわからんでもないが…三人は内心で嘆息した。

「そのメモは？」

『依頼人からの指示で覚えた後は燃やして捨てた。メーカーが書き換えた後も同じだ』

「ここにある設備は？どこから引っ張って改造した？」

『指示されたパーツを集めて仲間と組み合わせた。闇に行けばいくらでも置いてあるパーツだ』

黒幕は随分慎重と来ている。しかも暗号コードを知ることができるとなると、かなりの地位があるか上級のハッカーだ。

「最後に一つ…お前らの依頼人の名前と特徴を…」

周囲を警戒していたマグの磁力計に変化が見られた。何かが近くで動いている。

〈千里眼より０１８、０１９へ。東区ルート４３で擬装したハンターと思われるトラックと装甲バンを発見！そっちに向けて進行中、以上〉

〈もう来ている〈

シャドーの手の者からの暗号通信を受けてマグはジェミニに暗号通信で伝える。ジェミニも即座に尋問を中断して再び引き金に指をかける。

何かが振り抜かれ犯人の首を飛ばすのと、マグがダイヴ中で動けな

いエンカーのコードを切って引き倒したのはほぼ同時だった。
ジェミニは眼前に飛来した巨大な刺を紙一重でかわし、光学迷彩をした敵に向け発砲した。だが悉くが虚しく壁に当たっただけだった。
エンカーを守るために体勢を立て直して銃を構えるマグだが、自分とエンカーの頭に赤い光点があることに気づいて動きを止めた。
既に周囲を囲まれていたのだ。

「ににに！いい夜だな探偵ども」

壁に張り付いていた襲撃者は光学迷彩を解除して嫌らしい笑みを露にした。

「カメリーオ…！」

圧倒的不利を悟ったジェミニは銃を床に下ろしながら忌々しげに相手の名を呟いた。
カメレオン型レプリロイド―――第九部隊の副隊長スティング・カメリーオ。となると周りにいるのは隠密性に長けた第九部隊だ。
シャドーの寄越してくれた面子の数は不明だが、ヤバイことにはかわりない。
地面に座らされ、武装を没収されている間、立て続けに空気の抜ける音がした。
「あ！！」マグが声を上げる。先ほど自分達が縛り上げたレプリロイド全員が隊員によって射殺されているところだった。

「てめえ！大事な証人を…」
「黙んなU字磁石。お望みならお前さんの頭に風穴空けてやるよ」
後ろ手を拘束されながらも憤慨して食って掛かるマグを冷たくあしらい「連れていけ」と部下に命じたカメリーオは視線をエンカーに

向けた。
「で？何でここに金食い虫がいんの？」
「ただのボランティアですが何か？あと俺は『烏』だぜ副隊長」
おもいっきり口の端をひきつらせて嫌味をきかすカメリーオにエンカーは爽やかな笑顔で答えた。
内心は手がかりを皆殺しにしたカメリーオの電脳を焼ききりたいほど煮えくり返っていたが
「けっ！申し開きは人間の警察にしな」
しっしっと巨大な手を振りながら部下にエンカーも連行するよう指示した。
「アル！そいつらには何も喋るな！！」
会話の最中マグが始終怒鳴っていたが、結局隊員に下に着いた護送車までひきづられていった。

両手にレプリロイド用の手錠をかけられ、護送車にマグとジェミニが、エンカーは人間の警察に連行するためにと隊員二人の同伴で装甲バンの後部座席に乗せられた。
ロボットの二人とは対称的に始終大人しくしていたのには理由がある。
バンに乗せられると同時にゼロの影に潜っていたシャドーから通信が届いたからだ。

〈御曹司、取り込み中失礼します〉
〈シャドーか〉
両脇にいる隊員に気取られぬよう平素を装いながら、ナンバーズだけの暗号通信で報告を聞く。
〈西地区の下手人達が何者かに切り捨てられました。これが現場の映像です〉
電脳に送られたシャドーの視界映像には先程と似たような打ちっぱなしのコンクリートの床に事切れたレプリロイドたちが転がっていた。
死体の有り様は文字どおり『切り捨てられた』に相応しい有り様だった。
〈高出力のビームサーベルってとこかな。ナイフなら腕は飛ばさず首か心臓に一突きすりゃいいし〉
〈ゼロたちが突入したときには既に…かなりの手練れの犯行と見て間違いありますまい〉
〈こっちは吐かせてる最中にカメリーオに消されたよ。タイミング良くないか？〈
シャドーの視界が移動する。現場にシグマが到着したところだった。
〈……奴さん、俺より先に帰ったはずなんだが〉
〈これは思いの外、根の深い事件になりそうですな〉
高出力のビームサーベルを所有し、かつ四人のレプリロイドを抵抗する間もなく切り伏せることの出来る人物は限られてくる。
だが、動機がわからない。

〈ともかく、この状況を打破せんことには動きようがないから、マグたちはアストロに任せよう。こっちは…〉
〈既に尾行をつけております〉
〈サンキュ〉

バンは警察署でなく人気のない裏通りに入っていた。消される気配もあったが、チャンスでもあった。
パチンと何かが外れる音がして隊員たちは連行した男を見た。
『にひっ』と笑いながら自由になった手を見せる男。それが隊員たちが見たこの日最後の光景だった。

Ｂａｒ『明月』（前書き）

諸君、『ＡＰＰＬＥ　ＳＥＥＤ』と『攻殻機動隊』は好きか？
私は好きだ（何）

今回はオリキャラの嵐かも

Ｂａｒ『明月』

シティ・アーベル中央区から近い歓楽街の一画。
人気のないビルに『明月』と達筆な筆で銘打たれた酒場がある。
夜は景観の良さと日本風の内装、和食で知る人ぞ知る穴場である。
だが、営業時間外の明け方は閑散としているはずの最上階では物々しい気配に満たされていた。
従業員の人間やレプリロイドばかりでなく、合流したらしいサイボーグや戦闘型レプリロイドが全員武装し、来るべき時に備えて得物のチェックに余念がない。

「揃ってるか？月光」
「おう」

影から現れたシャドーは屈伸して関節を温めているレプリロイド『月光』にちかづいた。彼も顔をあげて返事をする。
１０代後半の幼さの残る顔にシャドーと同じ赤い目。同じ忍者の姿がシャドーマンと同系列のレプリロイドであることを示していた。
あえて差異を挙げるなら、頭に被ってるシンプルな鎧兜を模したヘルメットと、派手な赤いマフラー、そして微妙な身長差である。
まあ、そんなことはどうでもいい。（本人は多少気にしているが）
首領の『息子』にして代行を務める月光はぐるりと店内を見回した。

「集められる面子は皆来たぜ」

迷彩服と防弾に身を固めた傭兵あがりを始め、時代劇に出てきそうな笠とマントを羽織ったイタチ型のレプリロイド『青竹』、黒い袈裟に数珠繋ぎにした爆弾玉を肩にかけたタヌキ型レプリロイド『赤松』。

少数ながら組織のそうそうたる戦力が揃っていた。

「で、本当に事は起こるのかよ？」

「うむ、確定ではないが念を押すに越したことは無いからな」

ゼロ達が突入した方の犯人グループが持っていたであろうハッキングのデータはことごとく回収された後だった。犯人はすべてのデータを手に入れたと考えるべきだろう。

エンカーがもう一組から読み取った記憶データだけが頼りだが、シャドーが懸念しているのは工業用メカニロイドの一斉暴走だけではない。

人類とロボットの共存、そのモデルケースとして成立したこの街に潜在している崩壊の要因は数多い。

「ハンターへの警告は済んだか？」

「既に」

「軍に通報した方が早くねぇか？」

義眼をしたサイボーグの一人が言った質問に、別のサイボーグとフクロウ型レプリロイドが答えた。

「軍には匿名の予告として通報しておいた」

「ライフライン及び重要施設は奴等に守らせる」

「あとは無駄骨であることを祈るのみ、か」

そしてシャドーの号令のもと、全員がビルから出撃する。誰にも悟られぬようワイヤーで路地に降り散開。飛行能力の有る者は音を殺して起きかけた街に向かった。

日が登り、街が動き出した時間。シンボルタワーの最頭頂付近に潜伏していた管制特化型レプリロイド――千里眼と万里耳は自分たちの張ったアンテナに例の電波が観測されたことを確認した。

「信号を確認。照合、一致しました」

「視界映像を送ります」

千里眼が見た映像を万里耳が自己の電脳で共有しながら解析し、同時にハンターや敵の信号を解析して街に散らばっている仲間に送っていく。

彼らの他にも、先に偵察に出た仲間が各方面の映像を送り中継していく。

ハイウェイから望む高層ビル街の一画。

大戦時に廃墟になったビルの解体をしていたタイラントが突然動きを止めた。

それに気づいた現場主任が何か不具合が見つかったのかと近づいた。

最近の暴走事件も脅威だが、たまに大戦の置き土産――サリンなどの化学兵器や不発弾が見つかることがあるのだ。

マスクをしてビルの中を見るが異常は見当たらなかった。一緒に作業しているメカニロイドに聞いてみても異常は無いと言う。

首を傾げていると、タイラントは再び動き出して――猛然と逆走してプレハブの事務所に突撃した。

ハイウェイの防音ガードレールの上を下忍の『月桂』を連れて走っていた月光の視界に吹き上がる粉塵が見えた。

〈南地区ポイントＲ７８６にて暴走を確認。機種、タイラント。続いてルート３０にもプレス・ディスポーザーが暴走〉

目の前の惨事を皮切りに次々と報告されるメカニロイドの暴走。『親父』の懸念が現実になったのを実感した月光はこの騒ぎが街の全てに拡大していくと直感した。

「うわわ！？本当に始まっちゃった！」

「急ぐぞ！」

走りながら戦慄する月桂を叱咤し、月光は速度を上げて現場に向かった。

街にけたたましいサイレンが鳴り出したのはその直後だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7994w/

ワイリー軍団 in 21××年

2011年10月11日11時04分発行